

Movie Review 31 #15 時 17 分、パリ行き

『#15 時 17 分、パリ行き』(2018 年：クリント・イーストウッド監督)を NHK BS で視聴した。未視聴であった録画を、先日、患者さんから贈呈された本が『#15 時 17 分、パリ行き』だったので、これを機会に視聴した。

監督にとっては、『アメリカン・スナイパー』、『ハドソン川の奇跡』に続く実話に基づく英雄ものである。実物 3 人を主役に起用している。興行収入はよかったが、批評家からの評価は高くなかったようだ。

本作は 2015 年 8 月 21 日に高速鉄道タリス内で発生した乱射事件と事件に立ち向かった 3 人の若者を描いている。映画では、3 人の幼年時代（シングルマザーに育てられた問題児）から軍隊で人命救助部門に入隊しようとして努力した姿が描かれているが、一方で犯人の人生は全く語られていない（原作では触れられている）。両者の背景が等しく語られていないところが、評論家の評価の低さにつながったのかもしれない（単なる英雄映画に終わっている？）。映画のキャッチコピーは『その時、3 人の若者が乗ったのは運命の列車だった。』。目標を持って生きれば、いつかそれを実現する 때가 来ると映画は言っているようだ。

「偶然とは神が実名でサインしたくないときの別名かもしれない」（テオフィル・ゴーティエ）という言葉が文頭で引用されている。乗りたくもない列車で、目指したくもないパリに戦闘能力と人命救助力を兼ね備えた 3 人が偶々乗り合わせる。偶然が重なって 500 名以上の人命を救ったことが強調されている。それもそのはずで、2015 年はフランスにとって思い出したくもないテロに晒された年であったからだ。

2015 年 1 月 7 日、フランス・パリの風刺週刊新聞「シャルリー・エブド」の本社がイスラム過激派によって襲撃された。この事件では、編集長や風刺漫画家、コラムニスト、警察官を含む 12 人が死亡し、11 人が負傷した。犯人はアルジェリア系フランス人の兄弟で、武装して編集部に入力し、銃撃を行った。襲撃の背景には、同紙がイスラム教の預言者ムハンマドを風刺する漫画を掲載していたことがあり、これに対する報復として実行されたとされる。事件後、犯人は逃走したが、1 月 9 日にパリ郊外の印刷工場で人質を取って立てこもり、最終的にフランス治安部隊によって射殺された。同時期には、別の犯人によるユダヤ系食品店襲撃事件も発生し、さらに 4 人が犠牲となった。

同年 11 月 13 日、フランスのパリで同時多発テロ事件が発生した。この事件では、コンサートホール「バタ克蘭劇場」、レストラン、カフェ、そしてサッカー

ースタジアム「スタッド・ド・フランス」など複数の場所が標的となり、銃撃や自爆攻撃が行われた。犠牲者は130人、負傷者は300人以上にのぼり、フランス史上最悪のテロ事件の一つとされる。この攻撃は、過激派組織「イスラム国 (IS)」による犯行とされ、フランスのシリア空爆への報復として実行されたと声明が出された。実行犯は3つのグループに分かれ、銃撃や自爆を繰り返した。バタ克蘭劇場では、コンサート中の観客が人質に取られ、最終的に89人が死亡した。

タリス銃乱射事件とは、高速鉄道タリス車内でイスラム過激派の男が銃を乱射した事件である。2015年8月21日、乗客554名を乗せたアムステルダム発パリ行き的高速鉄道車内でトイレに入ろうとした乗客がトイレ内で自動小銃 AK-47 の装填音に気づき、出てきて取り押さえようとしたところ、男が自動小銃を発砲した。このとき乗客が被弾し重傷を負った。発砲が起きると乗務員は客室の通路を走って乗務員室に逃げ込み鍵をかけた。しかし、乗客の米国軍人2名と、米国人大学生（3名は友人）、英国ビジネスマン男性がテロリストを取り押さえ、制圧に成功した。米国軍人の一人は犯人にカッターナイフで切り付けられ、首と手を負傷した。犯人はシリアへの渡航歴もあるイスラム過激派の26歳のモロッコ国籍の男で事件前から情報機関にマークされており、事件当時は AK-47 のほかにも複数のナイフや拳銃を所持していた。

犯人を制圧した米国人たちの行動に対して、フランス内務大臣は「非常事態において偉大な勇気を示した」と讃えた。また、オバマ大統領は「英雄的な行動で悲劇を防いだ」と称賛し、両国とも勲章を授与した（映画の最後の30分でこの格闘と表彰場面が描かれている）。